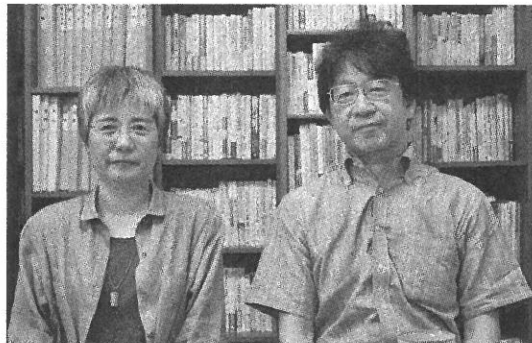


《特別対談》

来るところまで来た私たちの社会と これからの希望

児玉真美 × 斎藤貴男



斎藤「児玉さんとお会いしたかった」
児玉「光栄です。斎藤さんのファンなんです」
斎藤さんのラブコールで実現した対談企画。
今の社会のありようについて語り合っていた
できました。

◆「アシュリー事件」の衝撃

斎藤 私が児玉さんを知ったのは、ご著書の「アシュリー事件」が最初です。地方紙の書評委員をしていた時に、書店でたまたま手に取った。それまで何も知らなかった自分の無知が恥ずかしく、あまりに重大な意味をはらんだ内容に打ちのめされました。

児玉 2004年にアメリカのシアトルで重症重複障害のある6歳の女兒アシュリーに対して、子宮と乳房の摘出手術とホルモン大量投与による身長抑制が行われました。いずれも両親が希望し、病院の倫理委員会の承認を経て実施されたものです。2007年元旦に両親が、これを世界中に広めようとブログを立ち上げたことから、メディアが次々と取り上げて、世界的な大論争となりました。この一連の出来事が「アシュリー事件」です。私は正月明けにネットでこの事件を知って2週間くらい、パソコンの前に座りっぱなし

になりました。重い障害のある娘の親として気持ちには私にもわかる。でも、これはやってはいけないことじゃないのか。なぜこんなことが許されたのか。どうにも納得できなくて情報を追いかけていられなかった。ところがネットでは、批判よりも「娘の幸せのためにここまでやる親の愛は美しい」と賞賛する声のほうに圧倒的に多かった。愕然として、すっかり事件に取り憑かれてしまいました。

◆「できん者はできんままで結構」

児玉 斎藤さんの著書を拝読すると、どの切り口から迫っても、背景にある問題は同じ構図になっているのを感じます。能率や効率を重視するなかで「人間として大事にしなければならぬもの」が置き去りにされている。斎藤 経済のグローバル化によって新自由主義思想が蔓延し、多国籍企業の利益だけを絶対視する劣化しきった政治が諸悪の根源です。差別こそ正義、みたいな発想は教育問題に顕著です。ルポ「機会不平等」(2000年)ではゆとり教育を主唱した三浦朱門氏(作家。当時、教育課程審議会会長)へのインタビューが強く印象に残っています。彼はこう言いました。「できん者はできんままで結構。(ゆとり)で浮かせた手間暇カネを)できる者を限りなく伸ばすことに振り向ける。限りなくできない非才、無才には、せめて実直な精神だけを養っておいでもらえばいいんで